

コート・ジボワールの弔問外交

著者	原口 武彦
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア 経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アフリカレポート
発行年	1987-09
出版者	アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00008747

コート・ジボワールの弔問外交

原口 武彦

◆冠婚葬祭の季節

コート・ジボワールの3月は暑さの盛りだ。1、2月にかけて数日間、ハルマタンが上空にサハラ砂漠の砂を運んできて熱帯の太陽を包み、暑さをやわらげる。それがすぎると5月の雨期の到来まで酷暑の日々が続く。しかし、この国の農業の主な換金作物であるコーヒー、ココア、棉花などの収穫、集荷も一段落し、農民のふとこころはうれしい、顔もほころんで、冠婚葬祭にふさわしい季節でもある。

その3月、近隣の 아프리카諸国の首脳やその御名代たちが、続々と特別機でヤムスクロ国際空港に飛来した。アビジャンの北西240キロメートルの内陸に位置するヤムスクロ市は、ウフェ・ボワニ大統領の生地である。1983年3月、アビジャン市にかわってこの都市をコート・ジボワールの首都とする法案が国会で可決された。それ以前からウフェ・ボワニの生地として着々と都市整備計画は進められており、市内には街灯のポールでアーケードのように飾られた広大な舗装道路が縦横に走り、空港も大型ジェット機が離着陸可能な滑走路を備えている。しかしこの市の人口は、急激に増加しつつあるとはいえまだ10万たらず、普段はほとんど無人、無車の広大な道路を鶏が悠然と横切る姿をみることができるといえるほど閑散としている。

このヤムスクロ市の空港に、3月18日から19日朝にかけて降り立ったアフリカ諸国の首脳は、ガボンのボンゴ、トーゴのエヤデマ、ベニンのケレク、ニジェールのクンチェ、カメルーンのピヤ、リベリアのドウ、マリのアラオレ、ブルキナファソのサンカラと、国家元首である大統領だけで8名にのぼった。その他、国家元首が正式の名代を

派遣した国は、ディウフ大統領夫人を送ったセネガルをはじめ、コンゴ、中央アフリカ、ザイール、モロッコの5カ国、閣僚級の要人を団長とする国家の代表団を送り込んだ国が、ガーナ、カーボ・ベルデ、ギニア、モーリタニア、ナイジェリアの5カ国。フランスはシラク首相の名代として、首相つきアフリカ問題担当顧問フォカール氏を派遣し、アフリカ統一機構(OUA)のウマル事務総長も飛来した。

これだけの顔ぶれの各国要人がヤムスクロ市に飛来したのは、何か重要な国際会議が開催されたためではない。かれらは一人のコート・ジボワール人女性の葬儀に参列するために、ただそれだけのためにヤムスクロ市まで、激務の間をぬって馳せ参じたのである。アジュア夫人(Mamie Adjoua)、彼女はたまたまウフェ・ボワニ大統領の血のつながった姉であったにすぎない。

◆アジュア夫人とは

コート・ジボワール唯一の日報であり政府機関紙でもある『フラテルニテ・マタン』(*Fraternité Matin*, タブロイド版, 28ページだて)は、埋葬が行なわれた19日の前々日の17日付の紙面から25日付まで連日特集を組み、のべ40ページをさいて、この大葬儀を大々的に報じた。

しかし、この膨大な量の記事のなかで、アジュア夫人個人に言及した記事はわずか1ページたらず、故人の経歴、人柄などについて近親者のインタビューによって構成したものだけであった。それによれば、ウフェ・ボワニ大統領には2人の姉と1人の弟(若くして他界)がおり、今回、他界したアジュア夫人は2番目の姉であった(年長の姉は存命で今回の葬儀にも列席している)。故人は医師の

ポク氏 (Pauquoud, すでに他界) と結婚したが、自分自身は子宝にめぐまれず、同氏の先妻の子2人をはじめ、その他の親類縁者の子供10数人をひきとり、いずれも立派に育てあげたことが美談として語られている。夫の死後は、コーヒープランテーションの経営にのりだし、女手一つながらかなりの産をなしたらしい。ウフエ・ボワニと同様に敬虔なカトリック教徒で、ヤムスクロ市の最初の教会の建立には、大いに貢献したという。しかしアジュア夫人個人の経歴のうちには、彼女の葬儀がかくも国際的に盛大に行なわれなければならない要素は見出せない。

◆四日間の大葬儀

葬儀は、17日、18日夜、2夜つづきの「通夜」が行なわれたのち、19日の午前、埋葬とミサが各国要人の参列のもとにとり行なわれた。そして19日午後からは、22日午前まで、午前と午後に分けて国内各県ごとに割当てられた日時に、その県から集ってきた人びとが弔問の列をつくった。『フラテルニテ・マタン』紙はその模様を写した数葉の写真に掲載している。酷暑の最中にもかかわらず、カトリックの重々しい僧衣に身をつつんだヤゴ枢機卿以下の僧侶団。北部の県からの弔問団は、全員、ブーブーと呼ぶイスラム風の純白の衣服と帽子姿で列をなす。東南部のアカン語系の諸部族の伝統的首長たちは、金のメダルをまわりにはめこんだ、押しつぶしたトルコ帽のようなかたちの黒色の帽子に金箔の杖、小乗仏教の僧衣のように肩かけに着るあざやかな縞模様のパーニュ姿で参列者の席に居並ぶ。その前にはわざわざ持参した王位の象徴である床几 (ストール) を飾っている首長もいる。制服姿に身を固めたコート・ジボワール国軍の将校団、県知事をはじめとする地方行政官たち (コート・ジボワールの地方官吏は、軍服に似た制服を着用している)。いろとりどりの仮面、装束に身をつつんだ「郷土芸能」団も各地から参加し

て、葬儀といっても祭りさながらの様相を呈している。4日間にわたって延々くりひろげられたこの大葬儀のフィナーレは、バウレの伝統にしたがって、厄よけの踊りである。その踊りの行列のなかに、ウフエ・ボワニ夫妻の姿もみえる。

◆大葬儀が意味するもの

かくしてアジュア夫人の大葬儀は、3月22日、午後1時をもって無事、幕を閉じた。3月25日付の『フラテルニテ・マタン』紙は、最後にウフエ・ボワニ大統領のメッセージを掲げて、この大特集をしめくくった。ウフエ・ボワニ大統領自身がそのメッセージのなかでのべているように「……アジュア夫人は、党の指導においてあるいはわが国の行政において何の役割も演じたことはなかった」。それにもかかわらず「コート・ジボワール国民は、この全く家族的な死別の悲しみを全国的なそれ、さらには国際的なそれにさえ転換した」。なぜ、そうしたのか。ウフエ・ボワニはそれには答えてはいない。

「弔問外交」ということばがあるように、古今東西を問わず政治的要人にかかわる葬儀が政治的色彩を帯びて大々的に行なわれることは珍しくない。しかしアジュア夫人の葬儀の盛大さは、故人が全くの私人であり、たまたま政治的大人物の肉親であるというだけであったことを勘案するならば、きわめてきわだっている。ウフエ・ボワニの属するバウレ族は伝統的に母系制であり、故人がウフエ・ボワニの姉であるということは、ウフエ・ボワニ家の「血」の保持者として、父系制に基礎をおく社会の場合とは異なって、家系的に高い地位を与えられているのかもしれない。またウフエ・ボワニ大統領にとってはわずか二つ年上の姉ということで幼い頃からもっとも親しい姉であったということもあつたろう。ウフエ・ボワニ自身がそう述懐していたこともあるという。それにしてもこれらは、ウフエ・ボワニ個人にかかわる事情に

すぎない。隣国ブルキナファソの国家元首として、この葬儀に参列した青年将校あがりの若き政治指導者サンカラ大統領も、迷彩色の兵服にベレー帽という葬儀にやや場ちがいないつものいでたちで、記者団に次のように述べている。「……私がなぜここにやってきたかといえば、それはウフェ・ボワニ大統領にかかわる家族的な出来事に関して、きわめてアフリカのなわれわれの気持を表明するためである」。最愛の肉親を失ったウフェ・ボワニの個人の悲しみを慰めるための弔問であることを表明している。

この葬儀は、最愛の肉親を失ったというウフェ・ボワニの個人的悲しみをコート・ジボワール国民全体のさらには国際的な悲しみに拡大してしまった。それほどまでにウフェ・ボワニの人格は、単なる大統領という地位をこえて拡大され、文字どおり「国父」となったことをこの葬儀は証明したといつてよいだろう。

◆得票率100パーセント

1985年10月、ウフェ・ボワニは六たび大統領に選出され、90年までつまり独立以来、30年間、政権の座を維持することになった。すでにサハラ以南のアフリカ諸国では最長不倒の政権となった。この大統領選挙の際、ウフェ・ボワニは得票率、何と100%という奇跡をなしとげたと報じられた。すなわち『フラテルニテ・マタン』紙によれば全国有権者総数351万7259人のうち、棄権者はわずか717人、そして全国5388カ所に設けられた投票所に足を運んだ351万6542人の有権者は、1人のこらずウフェ・ボワニに信任票を投じている。得票率100%という極限的、奇跡的の数値をもって、自分に対する国民の信任の厚さを内外に誇示させたウフェ・ボワニ大統領をめぐるコート・ジボワールの政治状況と、今回の葬儀の盛大さとは無縁ではあるまい。

◆「国父」ウフェ・ボワニ

国際的にも、たとえば常日頃、機会あるごとにウフェ・ボワニ大統領に対する敬愛の念を表明してきたガボンのボンゴ大統領は、他の国家元首にさきがけてヤムスクロ入りし、ウフェ・ボワニは今や「伝語圏アフリカの最長老」であり、「私は、自分をウフェ・ボワニの家族の一員であるとみなしている」と述べている。

ウフェ・ボワニ大統領の言動にはもはや公私の区別は存在しない。ヤムスクロ市の中心部に存在する四方1キロメートル、高さ数メートルの白塚に囲まれたウフェ・ボワニ邸が私邸なのか大統領官邸なのか今や問う人もいない。それはもはや公私を超越した神殿の如くである。彼は、もはや部族の粹をこえて「国父」の地位におさまった。彼の私的な悲しみであったはずのアジュア夫人の死は、国民全体の悲しみとされた。

1958年、フランス共同体を拒否して完全独立の道を選んだギニアのセク・トゥレが1984年春、死去するや否や、彼が26年間にわたって築き上げてきた「革命的人民共和国」体制は、わずか数日のうちに崩壊してしまった。その他、数々のアフリカの政治指導者たちの盛衰を目のあたりにしてきたウフェ・ボワニは、実姉アジュア夫人の死去に対して与えられたかくも盛大なる弔意に何を感じていたのであろうか。

ところで、この葬儀について報じた『ジュンヌ・アフリック』誌(4月1日号)の記事には、アジュア夫人はすでに約6カ月前に死去しているが、正確な日付は公表されていないので定かでないであった。40ページにわたる『フラテルニテ・マタン』紙の特集記事を読みかえしてみても、なるほどどこにも、アジュア夫人が何の病気でいつ死去したかについては一言もふれていなかった。

(はらぐち・たけひこ/地域研究部)